

解説・大阪駅北地区開発

ひと足早くJR大阪駅新北ビルがその姿を現しつつあるなか、基盤整備が着々と進行し、本年度下期の工事着工に向けた建築計画の全容も明らかになった、大阪駅北地区先行開発区域。その中核機能であるナレッジ・キャピタルでは運営会社が設立、本格的に始動した。2期開発区域では、JR東海道線支線の地下化・新駅設置の着工が決定。あわせて開発ビジョンも公表された。北梅田のまちづくりがいよいよ本格化する。



提供：毎日新聞社

世界をリードする「環境先進地域・関西」の都市型環境拠点をめざす

2009年7月14日、第9回大阪駅北地区まちづくり推進協議会(以下、協議会、会長：平松邦夫・大阪市長)において、「大阪駅北地区2期開発ビジョン(以下、ビジョン)」が決定された。

ビジョンの検討を行ったのは、委員長の西尾章治郎・大阪大学副学長以下、学識者、地権者等15名からなる「大阪駅北地区2期開発ビジョン企画委員会」。2008年7月から2009年3月まで計6回の委員会が開催され、熱心な議論が行われた。

2期開発ビジョン—注目のその内容とは

■テーマは「環境」

ビジョンの前提となっているのが、2004年7月

に大阪市が取りまとめた「大阪駅北地区まちづくり基本計画」。この計画をふまえ、先行開発区域等との連携、さらには公民が連携して高度な都市機構を導入しつつ、民間開発を誘導し、大阪駅北地区全体としての機能向上が発揮されるまちづくりをめざすことがビジョンにはうたわれている。さらに、将来の大阪・関西を拓き、関西活性化に貢献することを目的に、環境分野における関西のポテンシャルを生かし、「環境先進地域・関西」としての存在感を世界に示すことも盛り込まれている。

まちづくりの基本的な考え方は、「環境」をテーマとし、『グリーン・アース』および『アンビエント・ライフスタイル』に取り組み、アジア・世界に向けて発信することで、世界をリードする『環境先進地域・関西』の都市型環境拠点をめざす。『グリーン・アース』とは、グローバルな社会・経済環境からの視点で地球温暖化への対応など地球規模の

環境問題に取り組むこと。そして、『アンビエント・ライフスタイル』とは生活の豊かさからの視点であり、快適な都市環境や人と自然にやさしいライフスタイルなど、人に近い環境づくりに取り組むこと。ビジョンではこの2つをキーワードに、以下の4つの目標を掲げてまちづくりを進める。

- グリーン・テクノロジーのイノベーション拠点
- 環境先進国をリードする人材の交流・育成拠点
- 居心地の良い、質の高い都市空間
- 自然と共生する技術や生活様式、都市空間を世界に発信する都市ブランドの創出

都市機能と都市空間が相互に関連を持ちながら、2期開発区域におけるこれらの目標を実現した拠点形成に取り組むべきとしている。

■「環境ナレッジ」と「実証フィールド」

2期開発の先導的役割を果たすのが、“ナレッジ・キャピタルゾーン(2)”(図1)。ここでは、①都市をフィールドに環境技術の実証実験などを行う「実証展示・集客」、②環境価値(ビジネス)を創出する「ビジネス創出支援」、③産学官や企業間の連携、人材育成を促進する「人材交流・育成」、④市民の参加や協働を促進し、環境活動の社会化を促す「都市文化創出」、⑤「環境」をテーマに都市ブランドを形成する「都市ブランド形成」の展開をはかる。そして、これらが先行開発区域のナレッジ・キャピタルにも導入されている「創造」「展示」「集客発信」「交流」の4つの基本機能に基づき、人・物・情報のダイナミックなインター

フェースとなり、新たな知的価値を創出し続けるのである。そのけん引役として整備されるのが、「環境ナレッジ」と「実証フィールド」。特にナレッジ・キャピタルの屋内外で展開する「実証フィールド」は、その一部が2期開発を象徴するシンボリックなオープンスペースとして多彩な機能を有するものとなることが期待されている。

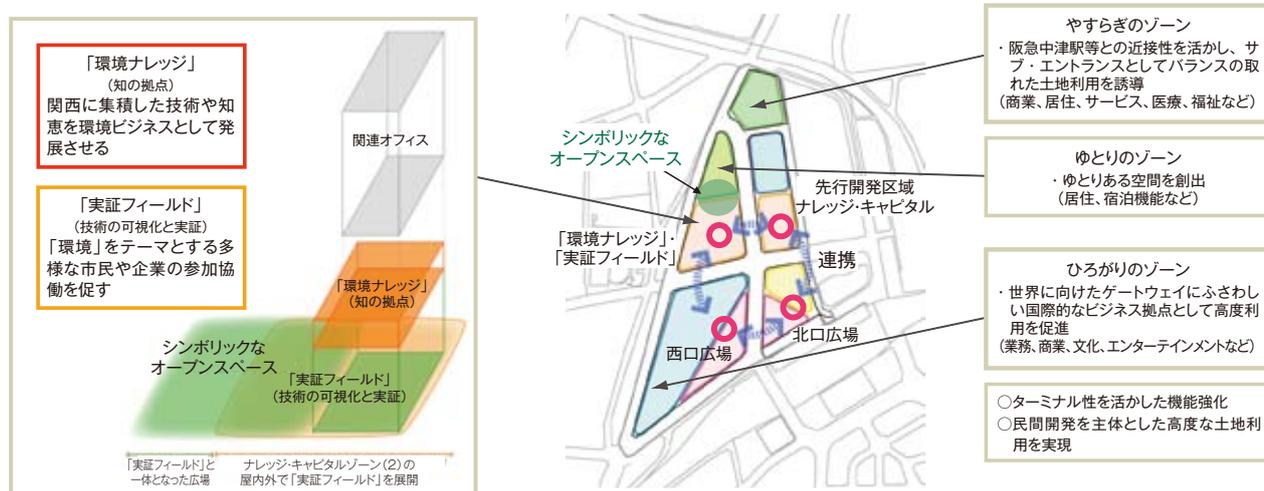
■質の高い都市空間の実現

2期開発では、アジア・世界のゲートウェイとしてふさわしい土地利用をはかり、高度な都市機能を集積するとともに、居心地が良くゆとりある都市環境の創出が両立する、持続可能なまちづくりを実現する。また、関西全体に開発効果が波及する広域的拠点づくりをめざし、地区全体に「環境先進地域・関西」を实践する先進的な環境インフラを取り入れつつも、緑やオープンスペースによってゆとりある開放的な空間を創出する。そのため、JR東海道線支線の地下化や新駅の設置など、開発を支える基盤整備を実施するとともに、国の施策とリンクした取り組みを展開するとしている。

ビジョン実現に向けて

今後、「2期ナレッジ・キャピタル検討委員会」を協議会のもとに設置することが決定している。委員長には、引き続き西尾章治郎氏を迎え、民間企業も委員として参加。ナレッジ・キャピタルの実現に向けて、産学官で具体化の道筋を立てていくこととなる。検討には関経連も深く関わり、ビジョンの実現に向け、協力を続けていく。

〈図1 ナレッジ・キャピタルゾーン(2)の都市機能および空間構成イメージ〉



※注: 下図は「大阪駅北地区まちづくり基本計画」に基づく

「大阪駅北地区2期開発ビジョン」で提案されたまちづくりのテーマは「環境」。「環境」をテーマに選んだ意図とは、『グリーン・アース』や『アンビエント・ライフスタイル』に取り組むとまちはどうなるのか、ビジョンの具体化に向けてどう検討を進めるのか——。ビジョンの取りまとめをリードした、2期開発ビジョン企画委員会の西尾章治郎委員長に聞いた。

環境技術の集積、環境実践都市としての実績を生かして2期開発区域を「環境のメッカ」に

——ビジョン作成にあたり、工夫された点とは。

西尾：向かい合う先行開発区域と2期開発区域を隔てるのは道1本。ですから、先行開発区域とシームレスな計画・ビジョンとなるよう意識しました。先行開発区域のKMO(P.7参照)の宮原秀夫・総合アドバイザーともその点は連携を取っています。

その上で、2期開発区域の特徴として「環境」をテーマに打ち出しました。もちろん、先行開発区域の計画でも環境にはかなり配慮しています。しかし、先行開発区域のテーマはあくまで「デジタルコンテンツ」や「ユビキタス・IT」、そして「ロボットテクノロジー」であり、環境はその前提条件にすぎません。2期開発区域では、環境そのものを徹底的に追及し、そこへ行けば環境のことはすべてわかるというエリアにしたいと考えています。

——「環境」はすでにいろいろなところで取り組まれています。特徴を出すのは難しいのでは。

西尾：「環境ではありきたりだ」「なぜいまさら環境なのか」という声は確かにありました。「環境」はもはや言い古された感もありますからね。しかし、このエリアのバックには、パネルベイやグリーンベイに代表される、関西企業が持つ最先端の環境技術の集積、そしてなにより、かつて「煙の都」と呼ばれ、急速な工業化による大気汚染などの環境問題に苦しみながらもそれを克服し、今の大阪を築いた「環境実践都市」としての実績がある。ここで「環境」を極める意義もポテンシャルも十分にあると考えています。

環境に関する課題を持つ国や地域は多く、今後、地球の存続にかかわる大きな環境問題も次々と発生するでしょう。そのような時、われわれが問題をどう克服し、そこからどのような教訓を得たのか、最新の環境技術とはどんなものか、その技術を持つ企業はどこにあるのか—2期開発区域を、そういったある種の解決策やヒントを与えられる、永続的な

「環境のメッカ」にしたいというのがビジョン策定に携わった私の大きな夢です。これが実現すれば、「環境」は大阪駅北地区全体のブランドになりますし、それが関西のアイデンティティーとなり、世界にアピールできる関西の普遍的なブランディングの構築にもつながります。そのためには、最先端の技術に加え、多様な人々が集まる都心で、環境問題について市民・企業・行政等の各主体がパートナーとして意見や情報を交換し、相互理解を深めてまちづくりを行う“環境コミュニケーション”が必要です。

また、米国をはじめ各国が環境技術の開発に躍起になっているなか、このエリアが「環境のメッカ」として求心力を持ち、投資を呼び込めれば、日本の環境技術のプレゼンスを世界に示すことができます。その意味でもここは重要な場所となるでしょう。

キーワードは「グリーン」と「アンビエント」

——先行開発区域と2期開発区域はどのように連携していくのでしょうか。

西尾：2期開発で整備されることになっている、シンボリックなオープンスペース(広場)を例にご説明しましょう。イメージは、ニューヨークのブライアン

なぜ、2期開発区域のテーマは「環境」なのか

西尾 章治郎 氏

Shojiro Nishio

大阪駅北地区2期開発ビジョン

企画委員会委員長

(大阪大学理事・副学長)

ト・パーク。サーカスや大道芸人が世界中から集まるもよし、夏にパラソルを広げてビールを飲むもよし、緑いっぱいの楽しい空間です。このスペースは先行開発区域の高層ビルの並びに対する緩衝地帯としても非常に生きてきます。さらに、ここに緑があることで、昆虫などが長距離を移動する際の休憩場所となり、生態系の保護にも役立つそうです。つまり、このスペースが2期開発区域だけでなく、先行開発区域ひいては大阪駅北地区全体の付加価値をあげることに貢献するということです。このように区域同士が良い影響を与えあうことでまち全体の価値を高めていければと考えています。

——ビジョンには『グリーン・アース』と『アンビエント・ライフスタイル』に取り組むとあります。

西尾：『グリーン・アース』は環境がテーマであるこのエリアのキャッチコピーと考えてください。「グリーン」は“緑”のほかに“若々しい”とか“活気に満ちた”という意味も持っていますし、“環境に優しい”というイメージも持つ言葉です。

「アンビエント」は先行開発区域で取り組むユビキタスから一歩進んだ、“今だから、ここだから、あなただから”というサービスを実現する技術です。ユビキタスは“いつでも、どこでも、だれとでも”コミュニケーションができる技術ですが、どちらかという自らアクセスして情報を得ます。一方、アンビエントが実現するのは、本人の了承のもと集め



ブライアント・パーク

られた膨大な情報データをもとに、その人が今、必要とするであろう情報や環境を周りが察知し、押し付けではなく“さりげなく”提供してくれることによる究極の環境や豊かな生活です。どこまでの『アンビエント・ライフスタイル』を実現するのが適切かを検証する必要がありますが、エリア全体に相当数のセンサーを埋め込むなどして、『アンビエント・ライフスタイル』を極めることに挑戦してみたいですね。

企業メンバーが参画した検討委員会でビジョンの具体化を一步進めたい

——「2期ナレッジ・キャピタル検討委員会」でも委員長を務められます。今後、どのようにビジョンの具体化をはかられますか。

西尾：今回の検討委員会には企業の方にもメンバーとして参画していただきます。“ビジョンを企業のビジネスとして成功させるためには、どのような形で具現化していくべきなのか”をいろいろな観点から協議したいというのが、引き続き委員長を務める私の抱負です。ブランド化を含め、このエリアを企業にとって魅力ある場所としてデザインするにはどうすべきか、ビジョンから一歩進んだ具体的な形に詰められればと考えています。そうすればビジョンだけでは漠然としているエリアの特徴がもっとはっきりしてくると思います。企業メンバーの方には“自社にメリットがあるか”という視点ではなく、もう少し大所高所からこのエリアの可能性について考えていただきたいですし、そういった意見を引き出せるような工夫をしたいと思っています。

このエリアがめざすのは、皆がリラックスしながら少し先の未来を体感できるまち。まずはその計画に携わるわれわれが楽しまなければ、楽しいまちになるはずがありません。責任の重さは感じつつ、楽しんで議論していきたいですね。



具体化進む先行開発区域

2012年度下期の竣工をめざす先行開発区域。建築工事の着工を間近に控え、その計画内容が明らかになった。「大阪駅北地区まちづくり基本計画」におけるまちづくりの5つの柱、世界に誇るゲートウェイづくり、賑わいとふれあいのまちづくり、知的創造活動の拠点(ナレッジ・キャピタル)づくり、公民連携のまちづくり、水と緑あふれる環境づくりに配慮した開発が行われる。



〈図3 先行開発区域全体イメージ〉

水と緑のネットワークで 風格・賑わい・憩いのあるまちに

まず、大阪駅に降り立つ来街者を出迎えるのが、JR西日本が整備・建築する新北ビル(2011年春竣工)に接する、大阪北口広場(図2)。北梅田そして関西の玄関口にふさわしい、世界に誇るゲートウェイとして風格ある空間が整備される。

そして、次に現れるのがA、B、Cブロックと続く高層ビル群(図3)。しかし、来街者の目に入るのはビルばかりではない。UR都市機構が施行中の土地区画整理事業区域約8.6haの半分、約4.3haは道路や広場といった公共空間にあてられており、北口広場からシンボル軸、さらには自然軸へと導く、カスケードや水

〈図2 大阪北口広場(イメージ)〉



路などによる表情豊かな水の空間が続く。また、シンボル軸には3列のイチヨウ並木なども配され、新しい大阪にふさわしい風格ある都市軸を形成する。さらに、自然軸では幅30mにおよぶ水と緑豊かな開放空間による憩いと潤いのある都市軸が、賑わい軸ではオープンカフェやケヤキ並木が沿道に表情とにぎわいを持たせる都市軸が作り出される。A、Bブロックのビル基壇部には回遊性のある屋上庭園も整備され、水と緑のネットワークにより、まち全体に風格・賑わい・憩いのあるまちづくりが進められる。

省CO₂環境共生型都市開発モデルをめざして

2009年5月、先行開発区域プロジェクトは国土交通省が支援する「住宅・建築物省CO₂推進モデル事業」に採択された。

本プロジェクトが提案しているのは、「複合事業者による複数街区での一体的取り組み」「実効性の高い省CO₂技術の採用」「持続可能なカーボンマネジメントシステムの構築」の3つの方針を柱とする「省CO₂環境共生型都市開発モデルの創造」。水と緑によりヒートアイランドの抑制をはかるとともに、建築物のCASBEE(環境性能評価)をSランクにするなどして、まち全体として高い環境性能を確保する。高層ビルへの自然換気機能の導入をはじめ、高効率熱源や太陽光発電などを採用し、これらの省CO₂技術を統括するシステムとしてBEMS(Building and Energy

Management System)をネットワーク化し、効率化をはかる計画が取り入れられている。

TMOとともに公民連携によるまちづくりを

カーボンマネジメントやエネルギーマネジメント、水と緑の公共空間の管理等を将来にわたり持続的に実施するのは、事業者による設立が計画されているまちの運営組織(TMO)。TMOが担う、長期的視点に立ったエリアマネジメントは、経済界や大阪市、大学等と連携して進められる。

ナレッジ・キャピタルの司令塔、KMO

先行開発区域の目玉施設、ナレッジ・キャピタル。その成功に向け、すでにさまざまな取り組みが始められている。

「ナレッジ・キャピタルって何?」との問いに答えるべく、その機能を実証・推進するイベントとして今年

3月に開催されたのが「大阪・北ヤードナレッジキャピタルトライアル2009」。ナレッジ・キャピタルのコンセプト「感性と技術の融合」をテーマとした15のコラボレーションプロジェクトに対して80を超える企業・団体・個人が参加、先行的な展示・実演を行った。

4月には、先行開発事業者12社により「株式会社ナレッジ・キャピタル・マネジメント(KMO)」が設立された。KMOに期待される役割は、ナレッジ・キャピタルで知的価値を創出する場とコラボレーションの機会を提供すること、そして主体的活動を統括し、コラボレーションプロジェクトの創出をけん引すること。いわばナレッジ・キャピタルの司令塔である。現在は、まちびらきに向け、中核機能であるナレッジ・キャピタル施設の機能や役割、運営方法など、具体的検討を開始している。

大阪駅北地区開発の成否のカギを握るといっても過言ではない先行開発区域プロジェクト。その成功には、今後も産学官の連携が不可欠である。

(北梅田プロジェクト推進室 樋口正憲)

〈先行開発区域整備イメージ〉



シンボル軸

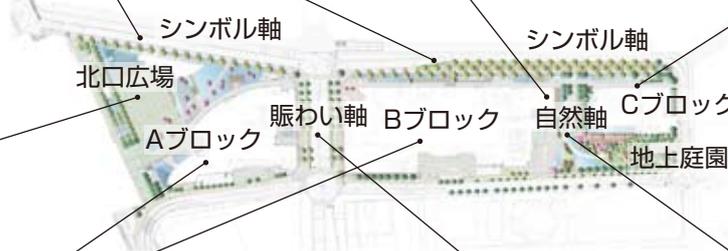
自然軸と地上庭園



都市回廊沿いの水路



北口広場のカスケード



屋上庭園



賑わい軸



自然軸と地上庭園の水景